

器体を前にして、削って、削って、また削る。

それを幾度となく繰り返す。窯に入れる直前まで、ひたすら削ることに専念する。

焼成を終えると、自分が造った記憶のないものが、作品として現れる。

焼成で収縮することや、削る面だけに集中してきたことにより、完成形を想像しきれ  
ていないことも一因にあるのだろう。そしてその完成形は、削る際、散々見続けている  
にもかかわらず、初対面のように、どこかよそよそしく、ドキドキ、ワクワクさえ感じ  
られる。

家業の製陶業において、多いときには、日に2000個のマグカップを、機械によって  
製造してきた。そのためなのか、同じ形のものですら、触るだけで微細な違いを感じ取  
れる。その積み重ねにより、触覚・視覚などの感覚の精度が上がり、面の凹凸、線の歪  
みも、「ひと皮分」「髪の毛一本分」の違いで、選り分けられようになった。

そんな感覚が先にたち、手が脳の働きをしているかのように動き、面・線・点・かげ・  
光を追究していく。

すると、奇妙なことに、考えることと、手の動きに時間差が生じ、「今」がわからなくな  
る。そうした時間感覚の曖昧さが、焼成後の作品をみたときの、印象につながってい  
ると思われる。

また、それは何処をどのように歩いてきたのか、わからないまま、やっとたどり着い  
たところが、思いもよらぬ景色の場所だった、そんな印象でもある。ただ一心に、ひた  
すらに削り続ける作業は、難所だらけの行程で、苦難の連続であるのにもかかわらず、  
心地よく、癖になってしまったようだ。

また、次の作品に向けて、一歩・・・